私が病気になって、国立がん研究センター東病院にお世話になりましたのは、２２年も前、５３歳の時でした。卵巣がんで受診しました。婦人科は中央病院へ紹介を受け、あちらで手術をしました。当時の一般的ながん治療では、患者に告知するかどうかは家族の意向によって決められることが普通でした。けれどがん研究センターでは、その頃から、すべて本人が詳しい説明を受け、患者自身が病気と向き合い、お医者様と看護師様を中心にした医療チームが一体になって病気と闘う姿勢を打ち出していました。入院、手術の様子も今とは大分違っていて、私の病状は、ごく軽いものでしたが１ヶ月の入院治療でした。患者同士も何となく連帯感を持つようになり、一緒に頑張ろうと言う雰囲気でした。先生方の患者への献身的なご努力には本当に感激し、みんな「先生や看護師さんがあんなに一生懸命にしてくださるから、頑張ろう」と必死に闘病していました。先生は朝、外来に出る前

にまず病棟の担当患者の様子を見に周り、夜、家に帰る直前にもう一度見回ってくださっていました。「先生や、看護師さんは一体、いつお家に帰っているのですか」とお聞きしたほどです。患者は担当の先生を、「私のお父さん」等と言ったりして信頼していました。何言ってんの！自分よりずっとお若い先生なのにって笑いました。看護師さんがたも本当に献身的な働きをして頑張っておられました。患者たちは、確かに過酷な病気との戦いに必死で立ち向かっておりましたが、その過酷さをさらに、医療チームが一体となって、病魔と戦ってくださる様子は本当に頼もしく、患者たちが「お父さん」と呼んで命を預ける気持ちになるものが病院全体に流れておりました。入院生活の中で、「みんなの力の限り」の生き方を見せてもらって、私も元気になったら、思いっきりの人生を生きたいと心に書き付けました。

その頃から現在まで、約二〇数年間、医療

の発達は本当に目覚しいものがあります。多くの命が救われ、寿命を延ばしてきました”がん”が昔のように告知もむつかしいような、希望の持てない病気では無くなってきました。医療の様子も随分違ってきました。

私は幸い一回の手術で完治し、６５歳まで仕事をし、退職してから、お世話になったがん研究センター東病院で、ボランティア活動に参加させていただくようになって１０年経ちました。多くのボランティアが、口々に言うのは、「ボラティアは自分のため！人様のお役にたつことがあれば、それはおまけ！」のことです。私は１週間に１日それも３時間だけ外来受付で、ご案内の手伝いをしています。まず決まった日に責任を持って出かけて行くという事は、自分の生活を規則正しいものにします。たった３時間ですが、随分多くの患者様及びご家族の来院に接します。みなさん”がん”と戦っている本人と家族です。今の私は健康になって、それらの方々を端か

ら見ているのですが、本当に多くの麗しい家族に出会います。病気をえて、辛く苦しいことも多いわけですが、家族が一丸となって立ち向かっておられる様子は、本当に心打たれ、すごいと感じます。”がん”という大変な病気になってこそ、実感として受け取れる家族愛の風景が見えるのです。現代社会はあまりに忙しく、みんなが時間に追われ、人の心が忙殺されているように見えます。そんな中で、家族愛の本当の心の動きをちょっとしたご様子から見ることができます。そんな時は、人間って素晴らしいなあと思います。

また、ある時は、お一人住まいの患者様が、何くれとないお話をなさるのを、傾聴したりすることもあります。ただ「人はみんな仲間です」という事をしみじみ感じながら、頷くだけですが、何とはなしの連帯感をいただくのです。「私も２２年前に病気しましてね。ここの病院でお世話になり、今はこうして元気にボランティアしてます」って本当に感謝

して申し上げられる幸せを感じます。

NEXT 先端医療の新しい幕開けの時に私はいます。２２年前、ガンに出会った体が想像することもできなかった新しい医療のすがた。

命あるものは、必ず死を迎えます。しかし、それが必ずしも辛いばっかりでない、良い治療と、いただける最大の寿命とを全うして、良き死に方ができるような素晴らしい医療の幕開けを輝かしい思いで迎えられることを念じております。